

Title	英文『日本公式案内』に見る観光と平和： 1940年代から1990年代における天皇像と皇居の記述から
Sub Title	
Author	長坂, 契那(Nagasaka, Keina)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2016
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.21 (2016. 7) ,p.148- 149
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	大会報告要旨
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20160702-0148

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

英文『日本公式案内』に見る観光と平和

—1940 年代から 1990 年代における天皇像と皇居の記述から—

長坂 契那

本報告は、1941 年から最終版の出版された 1991 年までの約 50 年間の間に発行された『公式案内』を検討することによって、その背後にある政治的な意図を明らかにするものである。『公式案内』とは、1910 年代から 1990 年代まで断続的に製作が続いてきた、「公式 (official)」と銘打たれた日本の英文旅行ガイドブックのことである。本報告における資料として、鉄道省国際観光局『日本 公式案内』*Japan: The Official Guide* (1941)、運輸省観光局『日本 公式案内』*Japan: The Official Guide* (1952、1958)、国際観光振興会『新公式案内 日本』*The New Official Guide: Japan* (1966、1975、1991) を用いた。これら『公式案内』への言及は、1930 年代以降の『公式案内』は「息切れが続いている」という評とともに (中川 1979: 238-239)、ブーアスティンが現代観光による真の文化の喪失を嘆く現代文化の戯画化の一例として 1957 年版を挙げているのみである (Boorstin 1962=1966)。また、具体的な分析視角として、『公式案内』が国家の表象を形成する一端を担うテキストとして措定し (長坂 2011)、『公式案内』における天皇とそれをめぐる歴史記述、天皇の居所である皇居の記述内容を分析対象とした。

報告では、天皇と皇居をめぐる記述に焦点を当て、戦前から現代に至るまでの記述が、かつては閉ざされ神聖性を帯びたものから次第に人間的で開放的に変化していくことを明らかにした。まず、天皇は、戦前は大日本帝国の統治者として、戦後は新憲法の下、国の象徴という人間的で民主主義的な平和の代弁者として描かれている。つまり、「新しい憲法が作成されたとき、天皇裕仁はその神話的神性を廃し、人間としての個性を示した (Japan National Tourist Organization 1966:100; 1975:136; 1991:101)」のである。この様子は、松下圭一の「大衆天皇制論」に見られる、かつての畏怖と崇拜の対象であった天皇が新憲法の下親しみやすい敬愛の対象として新しい皇室観に変化したという指摘と重なる (松下 1959a, 1959b)。また、歴史記述に関しては、日本が平和に貢献しているという文脈を一貫して用いている。戦前の皇国史観と軍国主義にもとづくものから、戦後は考古学的な記述に変化しただけでなく、かつての歴史記述と歴史教育に対する痛烈な批判と反省を強調し続けている。

次に、皇居に関する記述は、単なる日本の首都を代表する観光名所としてだけではなく、天皇のイメージ形成に寄与すると同時に、それを具現化して提示する場として描かれた。ここで読み取れたのは、戦前は神聖な閉ざされた場所であった皇居が、戦後は一般参賀や一部の庭園の一般公開によって次第に開かれていく過程である。同時に、最終版の 1991 年版において、一般参賀で皇族を「見る (can be seen)」ことのできる観光名所としての価値づけが、イギリスの詩人の賞賛によって行われている点も重要である。日本の象徴の居所である皇居が、今度は欧米の外国人の承認によって価値づけられたと言うことは、皇居の価値が既に政治性を失い、

消費する対象としての「観光名所」に位置づけられたと捉えることができるからである。皇居がかつての神聖で閉ざされた場所から消費の対象である観光名所へと変貌していったのは、天皇像の変貌と重なっている。

『公式案内』における天皇と皇居の記述の変遷は、かつての万世一系的な神聖視から、その否定と共に、親しみやすさを増幅させることによって大衆天皇制を対外的に拡張していく営みであった。それは天皇の脱政治化と共に商品化が図られていくという、皮肉にもきわめて政治的な意図が働いた結果でもあった。同時に、この結果は大日本帝国や日本国が目指す平和の含意の変化の歴史であり、観光というロジックの中で、平和的な側面を強調しながら国際的地位向上を目指していることの裏返しでもある。「平和」は、未来においても同様に、巧みにその意味を変化させながら観光の文脈の中で生き続けるだろう。

【文献】

- Board of Tourist Industry, Japanese Government Railways, 1941, *Japan: The Official Guide*, Japanese Government Railways.
- Boorstin, D.J., 1962, *The Image*, Anthenum Publisher.=1966. 星野郁美、後藤和彦訳『幻影の時代 マスコミが製造する事実』, 東京創元社.
- Japan National Tourist Organization, 1966, 1975, 1991, *The New Official Guide: Japan*, Japan Tourist Bureau.
- 松下圭一. 1959a, 「大衆天皇制論」 『中央公論』 74(5): 30-47.
- . 1959b, 「続大衆天皇制論」 『中央公論』 74(11): 114-126.
- 長坂契那. 2011, 「旅行ガイドブックと国民国家の形成 *An Official Guide to Eastern Asia* の位置づけ」 『関東都市学会年報』 (13): 60-68.
- 中川浩一. 1979, 『旅の文化誌』 伝統と現代社.
- Tourist Industry Division, Ministry of Transportation, 1952, 1958, *Japan: The Official Guide*, Japan Travel Bureau.

(ながさか けいな 和歌山大学国際観光学研究センター客員研究員)